

朝鮮（韓国）語¹でプレゼンテーションを試みる

金 錦花

はじめに

本実践は、学生が主体的に問題を設定し、解を見出していく思考能力、問題解決能力を伴う“積極的な学び（active learning）”ができることを前提にデザインし、行ったものである。そして教師の一方的な講義の授業から学生が主体的に動く、教授パラダイムから学習パラダイムへの移行・転換を目指したものであった。特に、語学教育の場合、更なる豊かな語学力とコミュニケーション能力が求められるので、学びのゴールを“分かる”ことに止めず、“できる”ことにつなげてみようとの試みでもあった。

この試み—朝鮮（韓国）語でのプレゼンテーションは、2014年からK大学の朝鮮（韓国）語中級クラスで始まった。本大学では、2019年²ポーアイキャンパスにてのチャレンジだった。中級朝鮮（韓国）語の後期授業の進度は、余裕があるため、2、3週を残して学習内容が終わる。定期試験を控えているので、本来ならこの2、3週は、学習内容の復習に当てるが、あえてそれをせず、2019年は、「朝鮮（韓国）語でプレゼンテーション」を試みることにした。

この実践は、K大学と本大学が同じプログラムの中で実施したプレゼンテーションであるので、本報告では、進行、指導、調査、分析については、二つの大学における実践を統合して行うことにする。そして上記で述べたようにシラバス内容を終えた後、余った授業時間を有効に利用するために取り付けた一つのオプションであることを断っておく。語学の場合、短時間で効率よくたくさんの語彙や文法知識をインプットする学習も必要とするので、やはり従来の講義は重要な役割を果たすとの認識は変わらず、講義を重視しつつ、オプションとして“プレゼンテーションする”との activity 要素を取り入れ「書く・話す・発表する」³—インプットした知識・技能をアウトプットする学びへと設計し、実践したものである。

1. プレゼンテーションの設計

1.1. プレゼンテーションの目的、目標、参加対象

まず、プレゼンテーションの目的を設定した。一つは、学習者が活動の中で積極性を発揮して主体的に問題と向き合い、内面に蓄積した知識や技能を道具に、自ら思考・工夫の認知プロセスを通して問題解決に至ること。今一つは、朝鮮語の知識を身に付けることであるが、それは既習の単語・文法項目の知識を定着させるとともに、新しい単語・表現・文法項目に触れることであった。例えば、「料理を作る」ことをテーマにした場合、普段テキストであまり触れることのない、料理に関する特殊な表現を用いることになる。固有語は、それなりの難度を伴い、外来語は音が近いわりに

微妙な違いに学習者は、悩むことになる。その中で自らが外来語の法則性を見出すことができれば、単語学習は一歩前進となる。そして既習文法項目を確認・見直す過程でありながらも、「どのようなつながればよいだろう」との新しい文法項目に出会うことになる。学習者には、辞書的な意味に頼ってすぐ吸収できる文法項目もあれば、語用的に“場合を見据えて”使い分けるもの、接続方法が厄介なものもある。後者の場合は、講義に頼って学んでいくことが望ましいが、前者のように辞書的な意味に頼ってすぐ吸収できるものであれば、学習者自身に任せて学ぶようにするのも賢明な指導法になるだろう。教師が何もかも教えることは、不可能であり、それこそ学習者の積極性・主体性を奪うことになりかねない。大学4年という限られた学習時間とテキスト1冊、2冊という限られた紙面での学びの中、学習者の積極性・主体性を育てておけば、学びの波長がぐんと伸びていくのではないだろうか。

次は、三つの目標を掲げた。一つ目は、自分が選んだ料理（韓国料理に限らず、日本の家庭料理、洋菓子等々）を作る過程を、朝鮮（韓国）語で順序よく、分かるように書ける。二つ目は、その料理の作る過程を、朝鮮（韓国）語で順序よく、聞き取りやすく発表できる。三つ目は、外国語授業と直接に関係ないが、話す内容の要点が分かるようにPPTを作成することができるとともにグループワークで、周囲の人と協働・協調しながらスムーズに活動を繰り広げられことができる等“汎用的な能力”を身に付けることを、ゴールに設定した。

その次は、彼らが目標に到達できるのか、特に朝鮮（韓国）語の知識においてプレゼンテーションの作文を書けるほどのレベルに達しているか、あるいは時期尚早なのかについて考えてみた。彼らは、朝鮮（韓国）語を週1回、あるいは週2回の授業を1年半学習してきたので、プレゼンテーションの作文を作成する知識の準備はできたと言えよう。PPT作成や朝鮮（韓国）語で順調に発表ができるか否かは、やってみないとどうも分からない考えに至った。どのような準備が必要なのか。どのように評価していくのか。どのように指導し、どのように軌道修正をするのか、さまざまな疑問と不安を抱いたまま2014年K大学からスタートを切り、少しずつ評価法、指導法を改善しながら2019年（2016年は、実施していない）まで5回の実践に至った。

今回の報告は、本大学の中級韓国語の学習者が初めて参加した年—2019年に焦点を当てることにする。2019年のプレゼンテーションの参加者は、K大学の朝鮮（韓国）語中級学習者24名、本大学の中級韓国語学習者4名であった。

1.2. プレゼンテーションの準備

まず、「何を発表するのか。」とプレゼンテーションのテーマを決める作業に入った。2014年用いたアンケート（表1参照）とグループでの討論の結果、自分で何かを作って発表したいとの意見に一致したので、②をテーマに決めた。指導の側としては、その分野の知識の準備、指導方法が求められることと、前年のフィードバック資料やデータを用いて指導の一貫性・効率性を図るため、5年間同じテーマにして、プレゼンテーション授業を行った。

表 1. 発表テーマのリスト

<p>下記のいずれかの内容を選び、朝鮮（韓国）語で紹介してみましょう。 *⑥～⑦は、特に発表したいテーマがあれば、記入してください。</p>
<p>①好きな名所について（日本の名所に限らない） ②食べ物の作り方について（自分が実際に作れるもの） ③文化について（日本の伝統文化等、外国文化でも可） ④大学生活について（聞き手が韓国の大学生だと想定して） ⑤芸能やスポーツについて（紹介する対象は、日本人に限らない） ⑥ ⑦</p>

次は、プレゼンテーションのスケジュール・指導過程・作文要領・プレゼンテーションの評価項目についてループリックを用いて、下準備1回目の授業ですべての情報を共有した。スケジュールの詳細は、下記の<表2>どおりである。人数が多い場合、発表日数を2日とし、前後7週間を必要とするが、人数が少ない本大学の場合は、6週間で終わることができた。

表 2. プレゼンテーションの準備及び実行スケジュール

第9週 (1回目)	<p>①作文・添削・PPT作成・グループワークについて全体のスケジュールを提示 ②作文要領について説明 ③評価項目と基準について説明</p>
第10週 (2回目)	<p>①作文1回目回収 ②グループワーク（何を作ったか写真を交えて、主に日本語でのやり取り）</p>
第11週 (3回目)	<p>①1回目添削して、作文返し ②誤用の表現、文法項目を取り出しフィードバックする ③作文の1回目見直しとPPT作り</p>
第12週 (4回目)	<p>①作文2回目回収 ②PPTをメールにて提出 ③自作のPPTを見せながら、グループワーク</p>
第13週 (5回目)	<p>①2回目添削して、作文返し ②4人のグループでリハーサル</p>
第14週 (6回目)	プレゼンテーション
第15週 (7回目)	プレゼンテーション

上記の計画どおり、後期第9週から通常の授業を受けながら、90分中30分ほど充てて、プレゼンテーションと関わるグループワークや作文添削に関するフィードバック、発表の予行練習をした。

作文は、プレゼンテーションの成功を決めるカギとなる。ゆえに、下準備1回目に作文の要領・指導方法・採点項目について詳しく伝えておいた。そして作文評価ルーブリックを配って⁴、その項目に従って自己点検しながら自分が納得できる良い作文を作るように指導した（表3参照）。

即ち、料理制作の過程を順序よく、分かりやすく説明すること、朝鮮（韓国）語の能力に関わる単語・表現・文法事項については正しく尚且つ適切に用いること、そして文字の綴り、文章記号、分かち書きにミスが起きないように注意しながら、500字（分かち書き、文章記号を含む）以上で作成するよう伝えた。2019年は例年と同じく朝鮮（韓国）語の作文に日本語訳を付ける以外に、作文に必ず単語帳を付けるようにした。これは単語学習の一環となった。

表3. 作文評価のルーブリック

	4点	3点	2点	1点
内容	料理制作の過程を順序よく、丁寧に、とても分かりやすく書いてある。面白いエピソードも入れ、内容が豊富である。	料理制作の過程を順序よく、丁寧に、分かりやすく書いてある。	料理制作の過程を順序に並べているが、もう少し丁寧に書けば、分かりやすくなる。	料理制作の過程の順序は、はっきりしていきなく、分かりにくい。
文の型	序・本文・結びがとても明確であり、前後の連結がなめらかである。	序・本文・結びが整っており、前後の連結が良い。	序・本文・結びになっているが、前後の連結が唐突なところがある。	序・本文・結びが整っておらず、前後の連結も良くない。
文法	文法表現の使用が正しく、学んださまざまな文法表現を活用している。習っていない文法表現もチャレンジしている。	文法表現の使用にミスが時々あるが、8割以上が正しく表現されており、学んださまざまな文法表現を活用している。	文法表現の使用にミスがあるが、5割以上が正しく表現されており、学んださまざまな文法表現を活用しようと努めている。	文法表現の使用にミスが多い。

語彙	単語使用において正しく、多様な表現を用いて説明しているため、文章が生き生きとしている。	単語使用において8割以上が正しく、多様な表現を用いている。	単語使用において5割以上が正しく、表現が単調である。	単語使用において数が非常に少なく、ミスがある。
つづり・分かち書き・文章記号	完璧	ミスが3個以内	ミスが6個以内	ミスが7個以上

そしてプレゼンテーション評価に関するルーブリックも事前に配った（表4参照）が、明確な目標を用いて、尚且つ正しい練習につなげ、納得できるプレゼンテーションに近づけさせることがねらいだった。

表4. プレゼンテーション評価のルーブリック

レベル 評価項目	目標以上を達成 (5点)	目標を達成 (4点)	目標まで後少し (3点)	目標達成まで 努力が必要 (2点)
構成	話が順序よく、尚且つ工夫して構成され、とても分かりやすい。	話が一定の順序に従って構成され、分かりやすい。	言葉を忘れており、また構成には飛躍がある。だいたい分かる。	話の順序には、問題があり、とても分かりにくい。
発音と抑揚	音がとても正しく、イントネーションも朝鮮（韓国）語に近い。	発音が正しく、イントネーションも朝鮮（韓国）語に大体近い。	発音ははっきりしないところが多く、日本語のイントネーションに近い。	発音はほとんど聞き取れない。日本語のイントネーションである。
表現力	躊躇したりすることなく、表情・動作がとても自然である。スピードも一定で流暢である。声は、はっきりして聞き取りやすい。	少し緊張している表情・動作が現れている。スピードが一定であり、声も大きく、聞き取りやすい。	とても緊張して言葉を忘れて何度も繰り返すことがある。スピードも一定ではない。声が小さくなることもある。	説明する言葉を忘れて、ノートを長く見つめたりしている。声もはっきりしない。

視覚的情報と 発表態度	PPTはビジュアル的で、熱心に説明しており、とても集中して聴くことができる。	PPTは、分かりやすく、平坦にしゃべっている。	PPTのスライドが少なく、聞き手の立場に立って説明する努力が必要だ。	説明に関係ないPPTスライドもあり、発表には熱心ではない。
----------------	--	-------------------------	------------------------------------	-------------------------------

プレゼンテーション全過程の採点方法と提出方法については、次のように決めた。作文とPPTの提出は、すべて個人メールでのやりとりとした。作文は、パソコンを用いて校閲するので、ハングルキーボードを使って作成することを前提とした。スマホの場合は、ハングルキーボードに変換して比較的簡単にハングル文字を打つことができるが、パソコンの場合、環境設定やスクリーンキーボード等参考しながら慣れる練習が必要となる⁵。この操作に関しては、プリントを配って説明も行った。採点においては、作文は教師が採点し、発表当日の採点は、教師はもちろん、学習者同士が相互評価を行うことを伝えた。

2. プレゼンテーションの本番と評価活動

2.1 プレゼンテーション本番

- ・冊子を配る。冊子は、ハングルの作文と日本語訳、そして単語帳の3部分に構成された。
- ・評価シートを配る（表5参照）。事前に配っている「プレゼンテーション評価のルーブリック」と合わせて採点し、コメントを書く。
- ・教師はビデオを撮る。当日全体の会場の見守り役として、採点は、その場でせず、授業時間外でプレゼンテーションのビデオの録画を見ながら採点をする。
- ・発表終了後はグループワークを行う。発表者は採点者でもあり、グループワークで自分の発表に対するコメントを聞く一方、他の発表者に対してコメントをする。相互評価の中で学びにつなげ、相乗効果をねらう。

表5. プレゼンテーションの評価シート

発表者の氏名：

タイトル：

	項目	内容（ルーブリックの概略）	採点（5点満）
1	構成	・構成が順序よく、論理的に提示され、聞き手が分かりやすい。	
2	発音と抑揚	・発音が正しく、なめらかである。 ・イントネーションも良い。	

3	表現力	・声は一定の大きさを保つこと。 ・躊躇することなく、スピードも一定である。	
4	視覚情報と発表態度	・提示物（PPT）のビジュアル的であり、分かりやすい。 ・意欲的であり、熱心さが伝わる。	
5	合計	／ 20	
6	コメント		

2.2 プレゼンテーションにおける評価活動

発表活動が終わると、すぐグループワークに入った。評価者は、なるべく発表者の良さを発見して“ほめてあげる”ことを前提に交流が行われた。笑い声も交えてとても盛り上がったグループワークになった。

評価のコメントは、主に分かりやすさ・発音・イントネーション・流暢さ・声の大きさ・表情・ジェスチャー・内容・PPT見やすさ・意欲・感想のいろんな視点から行われた。そのコメントをまとめてみた。（評価のコメントは、紙幅の制限のため、共有を割愛する）

相互評価は、〈表5 評価シート〉のように4つの項目とコメントを自由記述することで行った。「表現力」、「視覚情報と発表態度」、「その他（感想）」においていろんな角度からコメントが出た。朝鮮（韓国）語の専門性に近い項目、即ち「文の構成」、「朝鮮（韓国）語の発音・抑揚」に関しては、コメントが少なかった（しかし、発音と抑揚に関して鋭い指摘があった）。「構成が順序よく、論理的に提示され、…」について、自分の知識ではその場で判断するのが難しい」とのコメントもあった。相互評価は、学習成果に対する励み、自己の認識、他者の良い点を模倣して自己の改善に謙虚に取り入れる姿勢につながったと考えよう。

3. プレゼンテーション授業に対するアンケート

プレゼンテーションを終えて、指導の有効性や改善点を分析するため、アンケート調査を行った。即ち下記の5項目について「非常にそう思う」、「そう思う」、「あんまりそう思わない」、「そう思わない」の4段階での感想と、コメントを収集した。それと、2017年、2018年と比べて考察した。

項目1 朝鮮（韓国）語の勉強になったと思いますか。

2017～2019年のアンケート調査結果では、「そう思う」、「非常にそう思う」との回答が平均約96%であった。コメントは、次の通りだった。

- ・作文に単語帳を付けるため、時間をかけて調べた。そして文章を丸暗記したのが勉強になった。
- ・ミスしたことで、学んだ文法知識の再確認ができた。
- ・正しく発音するため、意識しながら練習を重ねた。
- ・自分の考えを朝鮮（韓国）語でまとめるよい機会を得た。

・事前にルーブリックをもらってチェックポイントに従って意識しながら練習をした。

教師の観察からも学習者にとって勉強になったと思う点があった。学習者の各々が400～500字の作文をしながら、平均38～74個の単語を調べて単語帳を作った。そして2回の添削の中でさまざまな文法項目や単語・表現について見直しをしたりと、学ぶ姿勢が見えた。事前にルーブリック評価表を配って、自己評価しながら進めた練習は、学習者にとって注意すべきポイントが明確になったことと、活動を行う上で一定の指針となっただろう。

項目2 評価の項目は妥当だと思いますか。

評価の項目は、構成・発音と抑揚・表現力・視覚情報と発表態度の4項目を用いたが、3年間平均90%以上が「妥当、満遍なく網羅している、適当」との評価だった。2018年の6.9%、2019年の4.8%は、問題提起もあった。

評価者の手助けになるため、日本語訳や単語帳付きの冊子を配ったが、“自分の知識ではその場で判断するのが難しい”、“5点と4点の差の判断が難しい”とのコメントがあった。これはルーブリックの不十分さではないだろうかとの反省もしてみた。今後、評価者の理解度を十分考慮に入れることと、各段階の“差”が明確に分かれるよう、評価用のルーブリックを改善すべきではないかと、課題も見えてきた。

項目3 文法・会話の授業で最終チェックとして妥当だと思いますか。

このアンケート項目に関しては、上記の二つの項目と比べると、「そう思う」、「非常にそう思う」との回答が1割以上下がっていた。そして「あまりそう思わない」、「そう思わない」の回答が2017年11.1%、2018年20%、2019年19%となり、2018年、2019年共にそれぞれ合計2割に近かった。その理由として、次のように述べてあった。

- ・得手不得手があるので、文法ペーパーテスト等のようなもので、これまでの授業の成果を出せるような措置も必要。
- ・前に立って話すのが苦手な人にとって、圧倒的に不利だ。
- ・大人数の前で発表するのは、かなり緊張して言う内容も忘れてしまうので、自分の本当の持つ力が点数に反映してないかも。

この授業を通して朝鮮（韓国）語の能力アップももちろん、それに関わる“汎用的な能力”のアップも検討に入れての活動である意図が一部の学習者には、十分に伝わってないことであろう。

項目4 全体の感想として楽しかったですか。

この項目に対して、「あまりそう思わない」、「そう思わない」との回答が、2017年には、11.1%と2018年には6.7%であった。2017年は、「項目3で妥当だと思わない」との回答と、「項目4の楽しいと思わなかった」との回答の割合が一致しているのに、2018年は、「項目3で妥当だと思わない」との回答が2割であるのに対して、「項目4の楽しいと思わなかった」との回答が1割未満（6.7%）を占めた。即ち、その中の1割の学習者が評価項目に対して「妥当だと思わない」が、プレゼンテーション自体は、楽しめたことになっていると解釈できよう。2017年・2018年の9割近いの学習者が「楽しかった」と回答しているが、学習の熱意と積極性の下で、ある程度達成感を覚えたのではと判断

できよう。

項目5 自己評価・相互評価を取り入れたことについて良かったと思いますか。

2017年、2018年の「項目4で楽しかったか」との質問から、2019年は、「自己評価・相互評価は、良かったか」に変えて尋ねてみた。統計の結果は、“そう思う”、“非常にそう思う”との二つの回答に集中していた。

相互評価は、責任感を持って授業に参加する姿勢及び集団学習の中、他人と協働して学ぶことにつながったと考えよう。さまざまな視点から評価を受ける、そして評価して上げることで自己内省にもつながっただろう。(コメントは、紙幅の制限のため、共有を割愛する)

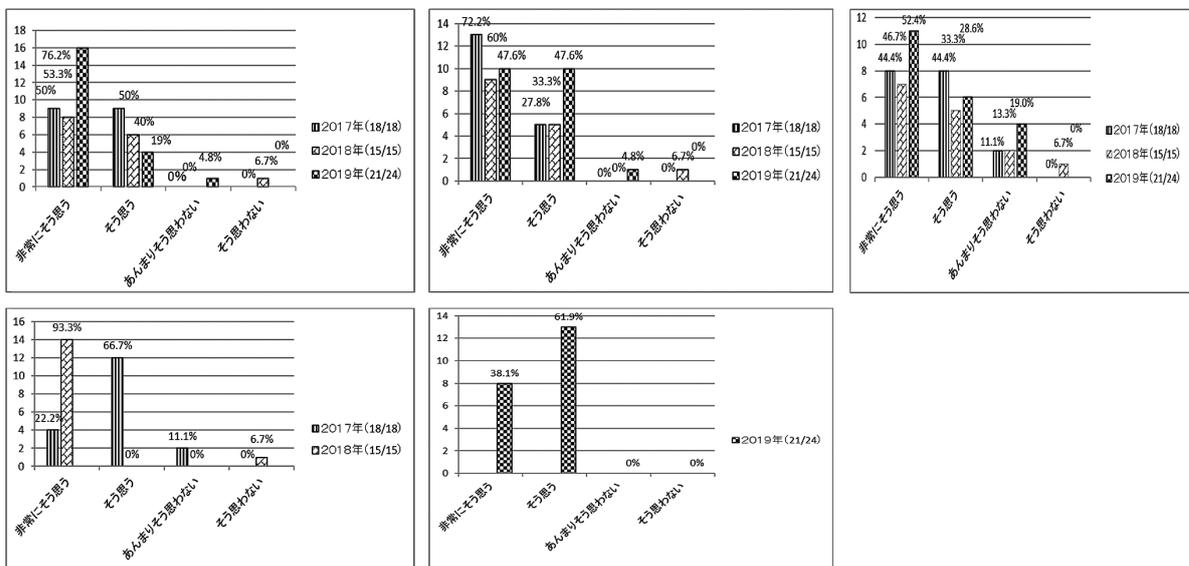


図1. 上段左-項目1 上段中-項目2 上段右-項目3 下段左-項目4 下段右-項目5

おわりに

教師の一方的な講義から学生が主体で動く、即ち自身で問題を制定し、調べながら作文し、PPTを作成し、グループワークで発表練習を行い、協働で学び、最後にプレゼンテーションに望む。このような一連の学習活動は、後期授業の一部分の時間に充てて行った“積極的な学び (active learning)”の試みであるが、アンケートの結果からも実に良い効果をもたらしたと言えよう。インプットした朝鮮(韓国)語の知識は、暗記して終わるのではなく「書く・話す・発表する」ことで生かされ、コミュニケーションにつなげて行くことの意味が分かったプレゼンテーションでもあった。発表が終わって1ヶ月が経ったある日、本大学の学生から自分の発表のビデオを見せてもらいたいとの依頼があった。プレゼンテーションは終わっても、学生の心には、振り返りたいほど引き付ける何かが残っただろう。2012年中央教育審議会からの「答申」では、「生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成すること

ができない。…」と唱えたのも久しく、大学での学びの現状はさほど変化はない。語学を教える私自身も教師一辺倒の講義中心から逸脱していない。「この大学の授業は、じっと座って聞く授業の方が一般的だ。」と、本大学の韓国語の作文で読んだことがあった。確かに学生が主体になって動く授業は、教師のスキルと、講義より何倍の準備時間がかかるので、まず覚悟が必要だろう。そして上記のアンケートのコメントでは、系統的な知識を求める学生達からは、「プレゼンテーションは、自分が本当にどこまでできたのか分からない」との不安の声もあった。いろいろな問題提起を真摯に受け止めながら、「大学での学びはどうあるべきか、語学の授業はどうあるべきか」について常に考えながら模索していきたい。

参考文献

- [1] 溝上慎一、(2016)『アクティブラーニングと授業学習パラダイムの転換』、東京：東信堂
- [2] 西岡加名恵、石井英真、田中耕治（編）、(2015)『新しい教育評価入門 人を育てる評価のために』、東京：有斐閣
- [3] 西岡加名恵（編著）、(2016)『教科と総合学習のカリキュラム設計—パフォーマンス評価をどう活かすか』、東京：図書文化社
- [4] 佐藤浩章（編）、(2010)‘高等教育シリーズ 150’『大学教員のための授業方法とデザイン』、東京：玉川大学出版部
- [5] 公益財団法人国際文化フォーラム、(2012)『外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育からの提言—』、東京：TJF

注

- 1 実践を行った本大学では「韓国語」の科目であり、K大学では「朝鮮語」の科目であるので、両方の名称を兼ねてこの報告書では、「朝鮮（韓国）語」と称する。
- 2 2016年から担当させていただいた有瀬キャンパスにおける朝鮮（韓国）語中級クラスでは、リレー授業のペアである文先生が駐神戸大韓民国総領事館主催の「大学生韓国語作文コンクール」に例年学生を参加させ、指導を行った。非常に刺激を受けた。
- 3 溝上（2014：7）は、アクティブラーニング（active learning）の定義で認知プロセス外化を伴う“書く・話す・発表する”行為を、能動的な学習として見なしている。
- 4 『めやす』（2012：68～69）では、事前に学習者に渡すことにより、学習者はたえず目標を確認し、自己評価をして自分の学習方法を内省し学習方法を修正することで学習効果が高まるのがこれまでの実践研究でわかっていると述べている。
- 5 リレー授業のペアである任先生の指導の下でハングルキーボードの打つ練習を行った。